

人工層位で掘り下げる方法（傾斜のある層は傾きに添って5cmずつ）に耐えられず、「層位的発掘」ができないか考えたが、土層の分布を追っていくと、洞窟内の土壌の変成作用や、げっ歯類の巣穴痕で突如途切れてしまう。やはり、人工層位に従う他無いのだろうか。

* * * * *

考古学者の書棚

「墓標の民族学・考古学」

朽木 量／慶應義塾大学出版会（2004）

中村 耕作

朽木量氏の博士論文をもとにした『墓標の民族学・考古学』は2004年に出版された。ちょうど私が大学院に進学した時期であり、私の考古学観を形成する上で大きなきっかけの1つとなった。同書の内容を帯から引用すると、「日本の近世墓標とニューカレドニア日系移民の墓標という2つの素材をアセンブリ（遺物の組成）とハイブリディティ（異種混交）の視点から、墓標造立の歴史的・社会的背景を考察し、モノの作り手・使い手の関係を問い直す物質文化研究を構築する」と要約される。

もう少しだけ詳しく紹介すると、まず序章・第1部で物質文化研究の理論的視座、第2部で日本および欧米における墓標研究史が整理される。そこでは、ポストプロセス考古学などの視座をもとに、考古学の「型式」や民族学における「民族」など、文化を固定的に捉える概念への疑義が示される。これに対して朽木氏が用意したのが、実際のモノの組み合わせ（「アセンブリ」）、異種文化の混交（「ハイブリディティ」）という概念である。

第3部では日本の近世近畿地方における農村、第4部ではメラネシアのニューカレドニアの日系移民社会を舞台に、主として墓標の型式組成の変遷の分析を核とし、これに文書などの検討を加味して、墓標型式のハイブリディティが論じられる。墓標の資料的利点としては、型式の選択にアイデンティティや社会的立場が大きくかわること、年代が明記されていること、墓地での量的把握が容易であることなどが挙げられている。第3部では、石材流通などの作り手としての石工側からのアプローチと、各村の間関係性という造立者側の事情の双方が加味されている。

朽木氏の理論背景には鈴木公雄教授の近世考古資料への数量的アプローチ、同世代の研究者たちと刊行したイン・ホッター教授招聘の反応としての『民族考古 別冊』や『メタ・アーケオロジー』などがあり、近世農村とニューカレドニアという2つの異なったフィールドは「民族学考古学専攻」を持つ慶應義塾大学ならではのものと推察している。本書は、この2つの資料群に対し、資料と方法を共有した上で、歴史学的・民族学的双方の観点を総合してまとめられたも

9年にわたる調査の末、結局人骨は見つからなかった。タブーンD石器群の担い手は、今なお不明である。彼らは未だどこかに眠っていて、いつか、我々がその姿を知ることはあるのだろうか。写真を眺めながらハヨニムで過ごした日々を想う。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは佐野忠史さんです。

のであり、「物質文化研究」としての考古学の意義を十分に示していた。一般的に日本では考古学を文献史学・民俗学とならぶ歴史学の一分野と定義し、資料（モノ）と方法（型式学など）に特徴を求めるという説明がなされてきた。一方、人類学の一分野と定義する場合でも、やはり形質人類学や民族誌学との相違はそこに求められる。本書は、その対象と方法を前面に押し出した理論的著作でもある。

私が本書から示唆された1点目は「モノ・作り手・使い手」の3者を意識した物質文化研究という視点である。「モノ」を単に文化・社会の反映とせず、再生産の媒体であるとみる考えはポストプロセス考古学でかねてより提示されてきた。そのモノに対して作り手・使い手の双方を総合的に論じる視点は新鮮であった。

もう1点は、それぞれの歴史的なプロセスを十分考慮した上で、2つの対象群を同時に扱うという方法である。これによって、「墓標」というモノの性格をあぶりだすのか、墓標を媒介として2つの「社会」を比較するのかが語り口次第であるが、動的な物質文化史を描き、比較するという試みに強い興味を抱いた。但し、朽木氏が歴史的背景を論じた材料は主として文献資料である。先史考古学の分野でこうした点を論じるには、純粋な考古学的なコンテキストを分析する必要がある。

昨年、私は博士論文をもとにした『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』を上梓した。前期の浅鉢、中期の釣手土器、後期の浅鉢・注口土器という3つの文化事象について、墓や廃屋儀礼を舞台にした土器の取り扱いの時期的変化・空間的変異を、製作属性・使用属性・出土状況の3者を総合して検討した。朽木氏とは殆ど面識はないのだが、國學院大學関係者以外で、理論的・方法的に最も強い影響を受けた単著として、『墓標の民族学・考古学』は今も机上の棚にある。

アルカ通信 No.130

発行日 2014年7月1日
企 画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所 (株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp